会員のひろば

奈良で『墨』

札幌市医師会
札幌複十字総合健診センター
池田　　薫

年に一度、妹と旅をしている。妹とは10歳の歳の差があり、子供時代はあまり遊んだ記憶はないが、両親を亡くしてから何となく姉妹旅をするようになった。昨年は奈良に行った。

世界遺産の古社寺や国宝の仏像と、奈良観光の王道も素晴らしかったのだが、墨の工房見学が興味深かった。製墨法は推古天皇の時代に高句麗の僧より伝えられたそうだが、奈良伝統の油煙墨は室町時代に興福寺の僧が灯明の煤が天井に溜まっているのをかき集め、膠と混ぜて作ったのが始まりだそう。固まる前の墨を握る、にぎり墨を体験させてくれる工房がいくつかある。せっかくなので現存する日本最古の製墨工房に行った。創業が最古なだけでなく、古来の製法を守り続けている唯一の工房だとか。姉妹揃って「最古」とか「唯一」という言葉に弱いのだ。

製墨の工程は、大きく分けて「採煙」「膠溶解」「練り」「型入れ」「乾燥」「磨き」「彩色」である。各作業場を行程順に「練り」までを見学した。まず「採煙」。直径20センチくらいの土器の皿に植物油と燈芯を入れ火を灯し、その上に蓋をかざして煤を集める。見学時には採煙作業はほぼ終了していたが、写真で見た光景は幻想的で美しかった。古めかしい採煙蔵の暗闇の中、炎をゆらゆらと灯した土器の皿がずらりと並んでいる。20分毎に職人さんが蓋を回転させ、蓋についた煤を掃き集める。今も当時と変わらぬ悠久な作業だ。煤の粒子の大きさを左右する芯も職人さんが一本ずつイグサを縒って作る。次は「膠溶解」。動物の皮や骨から煮だした膠を釜で炊く作業。驚いたことに、今まで墨の匂いと思いこんでいたのは、膠の動物臭を取るために混ぜた香料であった。そして「練り」。煤と膠を合わせて墨玉を作る作業。職人さんが全身真っ黒になりながら手や足で墨玉を練る。ここでいよいよ、にぎり墨。まだ温かくて柔らかい墨玉をもらい、ぎゅっと握って指型と指紋を付け、自分のお土産とするのだ。一方商品となる墨は木型に入れ、万力にかけて成型する。その後灰を敷き詰めた木箱に入れ、１週間から数十日かけてゆっくり、ゆっくり乾燥させる。さらに縄で吊るし、都合１～３ヵ月乾燥させ、磨き、彩色の工程を経て漸く完成品となる。

１ヵ月半後、忘れた頃に自宅に墨が届いた。木箱に入っていなければ、Bristol stool form scaleの２型の…か？　形は微妙だし、お店の人に母娘と間違われる残念な余話もあったが、連綿たる伝統を垣間見られたのは得難い思い出となった。

現存する最古の墨工房「古梅園」

にぎり墨